

汲古一心

『鑑賞の印』(二)

中村素堂

上の好むところ下もというわけでもあるまいが、これが清朝々野の収蔵をもって聞えた人々はみな自家の収蔵をほこつて、

△何々審定とか「何々審定真蹟」 △江上宣氏図書印

△安儀周家珍藏 △松雪齋希世之珍(明人)

△項子京家珍藏 △項墨林鑑賞章 △董氏玄宰(明人)

など大変な数にのぼるものがあり、印の字数も一字くらいから数十字まであるが、中には収蔵というよりも、これを見たことがある——といった、帝者の印、

△機暇清賞などから △○○過眼

といったもの、また大変得難い良い作品であると品定めをしたようなものも印として入れてある。これはどういふわけかみな小形のものが多い。

△神品 △上品 △無上上品 △心賞 △神游心賞

心賞などは品級をいうよりも、手放し難い感じまで出ている。この作品珍重の心は一作品の一部の離散をも惧れてか、紙を継いでいる場合その継ぎ目に、

△合 同 △范氏合掌

等の小印を入れているものも多い。これは絵画の方にも及んで、時には画面鑑賞上のさまたげになるようなものもあり、画の上方・中心に「○○御覽之宝」と大印を押し、絵の空白に大小伝々した人々の印があり、加うるに賛辞、詩はもとより「誰某がいつどこで拝見した」などという記も書入れてあり、ついに余白がなくなつて、裝潢(表装)の布地にまで書いてあるのさえある。日本の文人は大抵中国のまねをするといわれているが、江戸末期の極少数の文人以外このまねをしているものはないのも不思議である。

これは中国独自の愛玩の風習と見て、この印を読みその刻者の技術を嘆賞し、その作品が誰のところ旧蔵せられ、誰の手に移り、ついに何帝の御府に入ったのだとか、「誰々過眼」とあるから誰々も見ていたのだとか調べ上げて、いかに高度の鑑賞者の眼を経てきたか——と作品価値の推定に大きな証明を持たせ、今、自分もこの眼福を得ていると満足

感を味うのにすこぶる役立つのである。

これを少しく裏をかえせば作品価値をたかめるため、傑作名作ともなれば、それを傑作名作物たらしめるためにさらに貴人・有識名士の記・印を要請し一覽を得れば、印や記・題を添えてもらうべくつとめてきたらしいものもないのではないようだ。

大分むかしのこと、ある先生が、こういう書画の審定・研究の權威であつた故河井笙廬先生に陪して中国見学に行かれた帰途、上海に来て日本への土産にと古法帖を少々買われた。旅装をといつてしみじみ古法帖をながめ、さてご自身の所蔵印を捺そうとして見ると、帖の右隅に「鄭板橋」の印が捺されていた。これは非常にその先生を喜ばせ、他日河井先生にそのご斡旋の法帖が、「何ぞはからん曾て清朝の大家鄭板橋の旧蔵であつたとは……」と礼を述べられると、河井先生のいわれるのに、「それはいけない。上海のちよつと気のきいた古本屋は、大抵鄭板橋などの印をこつそり持つていて売れのおくれそうなものに、この種の印を入れ、少々時代をつけているんだから」とのことであつた。収蔵印も進展して、こんなことも起こつてくる。

先生は中国のことなら、こと文物に関するかぎり裏も表も知りぬいておられ、清朝末期から民国初期の書家の大宗はほとんど親しくされていられたし、しぜん中国往来も多く日常の器玩もほとんどあちらの物であつた。私はこの先生の日常茶飯のような談話の中に随分誨えられるところが多かつた。

中国文物の中でも文墨は、量質ともに想像を絶するものが、まだ未知の世界に大量に隠されていることは、このごろしきりに報ぜられる発掘品どころではない。故宮の収蔵などはほとんど紹介され尽くしているくらいに考えていたのが、さてこのような刊行物によって見ると、埋蔵物どころか伝世の名品さえ、まだまだ知悉しているとはいえないと思ひ知らされた。

そしてその伝世の名品の価値を顕示するのに、実に鄭重にしかも風雅に、長い歳月をかけて手を加え保護し愛撫してきたものだと思つと、呼吸のながい執拗なまでに愛玩する中国文人の心境に、時にはこちらも溺れて鑑賞するのだければ、あるいは真の中国文墨が味得されないのではと思ふこともある。